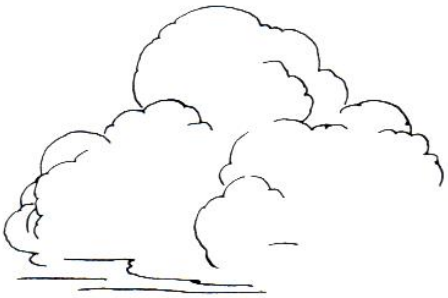
僕はもう41回の夏を知っている

鈴木 淳一



子供の頃は、戸外での遊びには困らなかった。

従って、本と言えば教科書か漫画以外眼中になかった。山に川に遊び、チャンバラに野球、メンコにビー玉、「読書は婦女子」でメチャメチャ幸せだった。しかし、どんなにアンポンタンに行こうとしても、人には憧れが必要であり、憧れはいつも現実と衝突する。こうして人生はアホな僕にも「私」と「世界」について考えることを強いてくる。困り果てた僕は、陽光の下を走り回り、夜には為すすべもなく、ひとしきり漫画を読んだ。「人生の師」は今何処？こうして僕が出会ったのは、『忍者武芸帳』だった。

反体制を貫いて、戦国を疾走する忍者「影丸」だった。家族も、村も、国も乗り越えて、ひたすら生にこだわり、こだわることで結びつき、結びつくことでさらに生き抜こうとする子供たちだった。信長軍の手におち、車ざきの刑に処せられる瞬間、検分後の森蘭丸に無声伝心の法でこう告げる—

「われら、遠方より来たる…また、遠方へ行かん」

僕はこのシーンに単純に感激した。何故か、「人は生まれて、一発やって、死ぬだけだ」が、うじうじとではなく「ばーんと死ななければならない」と思った。

無論、影丸だけでこれまで生きて来た訳ではない。中学時代にふとした弾みで読まざるを得なくなった『カラマーゾフの兄弟』は、何だか難しくてサッパリ分からなかったが、「さあ、みんな行きましょう！今度は手をつないで行きましょう。永久にこうするんです、一生涯、手を取り合って行くんです！」という最後のフレーズを読み終わった時の奇妙な興奮だけは今でも胸に残っている。まだある。高校時代には、生徒会室の窓ガラスに毎週詩を書き殴る奴がいて、様々な感慨に耽った思い出がある。

「汚れっちまった悲しみに　今日も…」、ふむ、
「夢はいつもかへって行った　山の…」、えっ？
「万有引力とはひき合う孤独の力である」、なるほど、「私は遅刻する。世の中の鐘がなってしまったあとで、私は到着する。私は既に負傷している…」やれやれ。

さらに、大学の一年が終わろうという頃、遠い友人から受け取った葉書は、心に泌みた。ただ俳句が一首、そこにはぽつねんと、本当にぽつねんと書かれてあった。

君逝けり　遠きひとつの 訃に似たり

もう「不惑＋2」歳である。相も変わらず僕は「人生の師」を探している。捜し求めて、テレビゲームに興じ、漫画を読み、本を読み、酒を飲んでは人々と語らっている。「人生の師」とは、きっと幾多の出会いを通じて僕自身の中に積もった諸要素が、徐々に発酵し、醸成してゆくものに他ならない、と信じながら、もうすぐ夏。「新しい無限に広い夏がやってくる」。「出発だ、新しい情と響きとへ」。

「すべての僕の質問に自ら答えるために」。　（外国語学部教授）